

連作小説 1

# アマナ

中島たい子

国が決めた相手との結婚を控えている「ヤマノ」と、結婚制度の存在しない国で生まれ育った「ロウド」。彼らが恋に落ちた時、二人はどんな「愛」の形を選ぶのか――。

案内されて、ヤマノのムスメがホテルの最上階の一室に遠慮がちに入ると、先に到着していた数人の異国人が、いっせいに彼女の方を向いた。彼らの後ろは一面の窓で、同じように背の高い摩天楼が視界いっぱい広がっている。ヤマノにとっては幼い頃から見慣れている眺めだが、今日は自分の方が異国に来たような気分だ。すでにカメラや照明の機材がソファを囲むようにセッティングされていて、そこに座るのかと思うと、さらに緊張してきた。

「ヤマノさんですね。お待ちしていました」

黒髪の男性が、ヤマノに微笑みかけながら歩み寄ってきた。ややくせはあるが流暢にN国語を話し、東洋系の血も混じっているのか肌も他の者より浅黒い。インタビュウを受けるといっただけで彼女にとっては非日常的な出来事であるのに、相手がF国、つまり異国のメディアだと聞けば、この数日間、食事もろくに喉を通らなかつたのは無理もない。

「私が電話でお話しした記者のロウドです」

けれど、金茶の瞳を除けば親しみがあるロウドの顔を見て、肩の力が少し抜けたのをヤマノは感じた。国外の人間と初めて接触するヤマノが脅えないよう、そのような人材を選んでよこしたのかもしれない。

「ヤマノです。よろしくお願いいたします」

「こちらはカメラマンのエリモア」

栗色の髪を巻貝のように結び上げた白い肌の女性を、ロウドがヤマノに紹介した。来月で二十四歳になるヤマノとさして年は違わないと思われるカメラマンの女性は、ニコツとヤマノに笑いかけ

て、N国語で何か言った。ヤマノも会釈を返したが、女性のカメラマンなど目の前にするのは初めてで、思わず上から下までじっくりと見てしまった。エリモアは笑みを湛えたままカメラをかまえて、ヤマノにソファに座るように指し示す。ロウドもエリモアも背が高く、絵画から出てきたかのよう美しく、なのにカメラは自分に向けられていて、華奢で十代にも見えるヤマノは恥ずかしさに俯きながら腰掛けた。

「ヤマノさん。あなたの国でも、名前は一つなんですね」

ヤマノの向かいにロウドも腰を下ろし、自動温度調整機能付グラスに入った冷たい紅茶が運ばれてきた。

「私の名前も『ロウド』それだけです。ファミリーネームは持ちません。でも逆に、あなたたちはそれしかお持ちにならない？」

インタビュウはもう始まっているようだった。

「はい。女性だけが結婚すると名前が変わります」

ヤマノはロウドの目を見てうなずく。

「個人名がなくて家族全員が同名なら、家の中ではなんと呼びあっているのですか？」

「生まれた順に女ならチヨージョ、ジジョ、サンジヨ、男はチヨナン、ジナンと。一人っ子の場合はムスメ、ムスコ。私はチチとハハに『ムスメ』と呼ばれています」

「当然、お父様もお母様も名前はない？」

「チチはハハをツマと呼び、ハハはチチをオットと呼びます。私も来年結婚が決まっています、モリ